弾薬庫に引火するまであと3分。引火したら艦が轟沈しかねない。配管を潜り抜け、結城のもとにたどり着いた宮藤は、2人の力をあわせて消火装置を作動させようとする。

宮藤「あきらめちゃダメです!!
2人なら大丈夫です!」

艦を沈めるわけにはいかない。(艦長命令に従って)士官は結城のいた部屋に注水を開始する。そのとき、消火装置が作動し、火が消えた。装甲鈑を焼き切り、宮藤と結城の無事が確認されると、水兵たちは歓声をあげるが、静夏は無言で立ち去る。

宮藤の行動は間違っている。そう静夏は言い放った。艦長の命令に逆らい、艦を沈没の危険にさらしたのだから。宮藤は反論しようとするが、静夏はそれを聞こうともしない。

静夏「宮藤さんが上手くいったのはたまたま! 偶然です!」

宮藤「だって」

静夏「命令は絶対です!」

とへのオマージュが込められている。

【最古参の判断】

扶桑皇国海軍の艦船内では階級による指示系統だけでなく、勤務経験の長さも重視されていた。とくに最古参の兵士は、新人兵士にとって一挙手一投足を見習わなければならないお手本であり、その判断は重視しなくてはならないものであった。

【「水密扉閉じ、応急注水!」】

当時の艦船には、艦内に注水することでダメージコントロール(艦船が沈まないようにバランスを取る)ができるものもあった。今回の事件では、弾薬庫のすぐそばで出火したため、その火災現場を密閉、補助発電機室全体に注水することで、延焼を防ごうとしたのだ。

【宮藤が補助発電機室に入れた理由】

静夏が魔法力でこじ開けても、入ることができなかった部屋に宮藤は勇気を振り絞り、入っていく。これは身体の小さい宮藤ひとり分だけ入るスキマが空いていたため。宮藤はアレがちっちゃくてペったんこなので入ることができたのだ。静夏は残念ながらアレが大きすぎて入れなかったのである。

【アフリカ】

1945年時のアフリカは、ネウロイと人類がしのぎを削る激戦区。その勢力図は日々更新されている。南アフリカ近辺の状況も不明である。